鷹・鷹場・環境　NEWS　　2019.10.3

Vol. 8

鷹・鷹場・環境研究会
The Society for Hawks, Hawking Grounds, and Environment Studies

佐渡市内トキ観察フィールドワーク報告

福田　千鶴

2019 年8月23日(金)

佐渡市内田園地帯へ

2017 年 8 月 23 日（金）午後より野生のトキの生態観察をおこなった。前日より佐渡入りをして事前調査をしていただいた久井貴世氏の案内で、3 台の車に分乗して佐渡市貝塚地域に移動し、野生トキの観察を行った。トキは事前調査時から若干場所を移動していたとのことだったが、採餌や羽繕いをする野生の群れを観察することができた。警戒心の強いトキの群れや空を実際に舞う姿を目視できたのは、貴重な体験となった。

鷹狩の獲物にトキはあまり出てこないが、伊達政宗が豊臣秀吉に送った「目赤鶴」は「トキ」だったのではないかと推定されている。実際のトキの目は赤くないが、遠目にみると目が赤いようにもみえるし、羽を閉じて餌をついばむ白い後ろ姿は鶴のようにもみえた。

トキの森公園にて

次にトキの森公園に移動した。「トキ資料展示

館」において、本間獣医師による解説をうけながら、トキの生態や歴史について知見を得た。トキは明治頃までは日本全国に棲息していたが、その後次第に減少し、特に戦後の森林伐採と減反政策によって里山と水田が急速に減少したため、トキの棲息地が佐渡島のみになり、1980年代以降、佐渡の人々がトキの保護に努めたため、現在のようなトキの棲息が復活したということである。

「トキふれあいプラザ」ではガラス越しに間近にトキを観察することができ、トキの形態や採餌の特徴、成鳥と幼鳥の違いなどを確認した。トキの成鳥は羽を広げると 123 cmほどにもなる大鳥であるとのことだが、現在でもトキの天敵は猛禽類とのことで、ときおり鷹に襲われたトキが館に運び込まれるとのことであった。大鳥であるトキを襲うのは、経験の少ない若鷹だということや、トキは採餌に夢中になると上方に意識が向かなくなることが多く、そのため野外ではサギ類の行動に反応して危険を回避

したりするそうだとの貴重な話を本間獣医師から伺うことができた。

その後、佐渡市新穂潟上で野生トキのねぐら入りを観察する予定であったが、直前に大雨が降ったためトキの行動が変わり、久井氏が事前調査をした時のような群れを確認することはできなかったのは残念だった。

以上、途中大雨も降ったが、全体的には気候も涼しく、無事にトキ観察フィールドワークを終了した。

第５回　研究会

8 月 24 日（土）

やまき両津ホテル内会議室（朝日の間）にて研究会　参加者19名

9:00～9:20　研究会打ち合わせ

9:30～11:30　報告 1　東昇「伊予大洲藩主の狩御鷹野場と生業」

17 世紀後期から 18 世紀末にかけての大洲藩主の狩の実態や鷹匠、御鷹野場に指定された村の生業などについての報告があった。河川に沿って設定された御鷹野場において、川漁と鷹狩の関係性を読み解くとともに、鷹をめぐる怪異伝承といった新たな論点の提示もあった。

（昼食）

12:30～14:30　報告 2　渡辺浩二「越後村上藩主松平直矩の鷹・鷹狩と動物」

『松平大和守日記』をもとに、藩主の越後在国時の鷹狩の様子や鷹の生息地や環境などについて詳細な分析が報告された。特に、村上では大鷹を用いていない点が注目された。また、鷹にとどまらない多様な動物の贈答・購入など、近世前期の生態系について地域性をふまえつつ網羅的に紹介され、興味がつきない豊かな内容であった。

14:30～16:30　報告 3　中野渡一耕「盛岡藩の巣鷹捕獲について」

三戸町小笠原家文書「巣鷹御用覚帳」の分析を通して、盛岡藩の巣鷹御用懸の実態が具体的に明らかにされ、巣鷹の捕獲がいかに危険な行為であるか、といった問題から捕獲時のトラブルなど、巣鷹の管理体制といった新たな研究分野が開拓された点で大きな意義があった。

8 月 25 日（日）

ホテル内会議室にて研究会　参加者 18 名

9:00～11:00　報告 4　山﨑久登「鷹場領主と御救－幕末期の横井家鷹場を事例に―」

尾張藩上級家臣横井家の拝領鷹場において、横井家が鷹場領主として鷹場領民にお救をしていた問題を幕末期に焦点をあてて検討した。そのなかで、嘉永4年に鷹場が拡大する問題と、それに伴う鷹場領民からの鷹場返上嘆願など、鷹場に指定されることがいかに領民の生業に影響をもたらすかという観点からの検討がなされ、前回までの検討を大きく進展させる研究報告であった。

11:00～11:30　総括

両津港にて解散

有志にて佐渡金銀山、佐渡奉行所跡を巡見後、解散

報告要旨１

伊予大洲藩主の狩、御鷹野場と生業

東　昇（京都府立大学文学部）

伊予大洲藩主の狩は、17 世紀後期、2 代藩主加藤泰興の代には、城下近隣の鷹野で小規模な狩が行われ、藩主と藩士・領民が出会い交流する場であった。18 世紀には、狩りをしない藩主も登場するが、軍事演習、獣害対策、武の象徴としての狩と変化し、領民の見物の対象、また怪異と遭遇する場でもあった。18 世紀末の 10 代藩主泰済の代に、柳瀬山における御代始の狩に約 4000 人の大規模動員が行われる一方で、老人・奇特者の褒賞、難渋者の御救が実施された。この狩を支える鷹匠は、下級藩士の世襲、巧者や同業役を養子とし、屋敷に鳥を飼い設備を整えていた。また狩の場は、御鷹野場など鉄砲停止場として、鳥見方や鳥目付が監視し鳥獣が保護される。この保護は、領民の生業とせめぎ合い、獣害対策としての踏出、威筒願が各村から出されている。一方で藩の川漁、御用築設置、鮎の時献上と比較することで、藩主の狩と領民・生業との関係の特徴を分析できる。

報告要旨２

越後村上藩主松平直矩の鷹・鷹狩と動物

渡部浩二（新潟県立歴史博物館）

17 世紀中期の越後村上藩主松平直矩（1642～92）の日記（『松平大和守日記』）をもとに、直矩の鷹・鷹狩について素描した。直矩所有の鷹は村上在城時に 20 居前後にもおよび、それらは江戸の松前屋敷から購入したり、縁戚の大名らからの贈答品もあったが、村上産の隼や鷂が中心で、領内で捕獲する体制が確立していた。直矩は自ら鷹狩に出ない場合でも、鷹を鷹師（鷹匠）に預け、領内各所で頻繁に鷹狩・訓練させて、捕獲した獲物を詳細に注進させていた。江戸藩邸でも複数の鷹を飼育していたが、松江藩主松平直政や福井藩主松平光通ら縁戚の大名が将軍から下賜された恩賜鷹場や幕府鷹匠の預り鷹場に鷹師とともに遣わしており、江戸での飼育・訓練の状況の一端が明らかになった。

また、直矩は鷹以外にも馬・犬・小鳥などの動物の贈答・購入を頻繁に行っており、当該期の武家の動物に対する関心の一端を指摘した。また、日記中には現在は絶滅したニホンオオカミやニホンカワウソを村上で捕獲した記事や、江戸藩邸でも多様な動物を捕獲した記事がみられ、当時の動物生息環境の一端を紹介した。

報告要旨３

盛岡藩の巣鷹捕獲について～三戸町小笠原家文書「巣鷹御用覚帳」の分析から～

中野渡一耕（青森県県民生活文化課
県史編さんグループ）

盛岡藩における鷹場や鷹狩りの研究はあまり進んでいないが、本報告では、三戸代官所(現青森県三戸町)巣鷹御用懸を宝暦元年（1751）から安永 7 年（1778）まで 28 年間に渡って勤めた所給人（他藩でいう郷士）小笠原庄左衛門の留書から、同藩における鷹狩り用の巣鷹(多くはハヤブサ)捕獲の実態について分析した。

巣鷹御用懸は、近世中期に巣鷹捕獲のため、藩内 4 か所の代官所に置かれた役職である。巣鷹の捕獲は、山の見回りを始める 3 月頃から、巣鷹を巣下げし、盛岡の鷹部屋に納入する 6 月頃までが業務時期であるが、その見回りや捕獲は、巣下げを監督する所給人や実際に捕獲する「巣子下げ」という専門の百姓のほか、肝入・山守など多くの村人が動員される一大作業だった。藩の権力を背景にした鷹の権威の大きさが見てとれる。また藩用人の指示により、捕獲の要・不要が判断され、また巣懸（営巣）・貝割（孵化）・巣下げの度に代官や用人に報告させるなど、厳格な管理体制が敷かれていた。一方で、いったん捕獲不要と指示されながら「急御用」のため慌てて捕獲する例など、藩の方針に振り回される現場の様子も垣間見え、藩政と地域の結節点にあった所給人の業務の特性が現れている。

今後は捕獲された巣鷹の行方（藩の入用か贈呈用か）や、藩の鷹匠組織における巣鷹御用懸の位置づけ等が課題である。

報告要旨４

鷹場領主と御救
―幕末期の横井家鷹場を事例に―

山﨑久登（東京都立砂川高等学校）

本報告は、尾張藩の重臣である横井家の鷹場を対象とし、主に嘉永4年（1851）の増拝領前後の鷹場政策を検討したものである。明らかになったのは、横井家の鷹場領主としての実態と、鷹場政策によって地域で生じた問題の内実についてである。

嘉永4年に鷹場に編入された地域は、元々は尾張藩の運上場であった。同地域の村々は、生業を継続させるため、輪中という特性に依拠して御救に基づく狩猟継続を横井家に求めていった。横井家側もこうした訴願を認めざるをえず、運上銀支払を条件に、御救の名目で漁猟を許可することになったのである。また、輪中地帯で発生する水害に対しては、横井家が村々に白米を給付するなどの御救を行っていた。しかし、やがて鷹場の存在自体が生活を脅かすものとして領民から認識され、鷹場領主が「御救によって領民の生活を成立させる」という構造は、自己矛盾を生み出すことになっていったのである。

編集後記

本年度2回目の NEWS LETTER をお届けします。今回は8月に実施したフィールドワークと第5回研究会の内容です。トキ観察は、ちょうど換羽を終えたトキとまだ少し灰色の羽が残ったトキをみることができました。ツルとの比較ができるようになったことは有意義な経験になったと思います。

また、研究会も大変充実した内容で、白熱した議論をすることができました。やはり4年間も積み上げてきたことが、共同研究として大きな実りを結びつつあると感じる2日間でした。次年度にかけては、その成果を広く社会に向けて発信していくことにも取り組んでいきたいと思っています（ち）。

鷹・鷹場・環境 NEWS　VOL. 8　2019 年 10 月 3 日発行　鷹・鷹場・環境研究会編集・刊行

〒819-0395　福岡市西区元岡 744　九州大学基幹教育院福田研究室　TEL：092-802-6019